

【報告】

急性期看護学実習における遠隔実習の実際と今後の課題

氏原 恵子¹⁾ 藤浪 千種¹⁾ 乾 友紀¹⁾ 寺田 康祐¹⁾ 伊東 千世子¹⁾
大石 ふみ子¹⁾

1) 聖隷クリストファー大学看護学部

Implementation and Future Challenges of Remote Practice in Acute Care Nursing

Keiko Ujihara¹⁾ Chigusa Fujinami¹⁾ Yuki Inui¹⁾ Kousuke Terada¹⁾ Chiseko Ito¹⁾
Fumiko Oishi¹⁾

1) School of Nursing, Seirei Christopher University

《抄録》

A 大学看護学部における臨地看護学実習は3年次10月秋セメスターから4年次春セメスターで実施している。2020年4月新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の拡大により臨地看護学実習は各施設から実習受け入れ中止の連絡があり、急性期看護学実習は遠隔実習を実施することが迫られた。短期間で遠隔実習の内容の検討を行い、事例患者を用いた看護過程の展開、周術期看護関連の文献レポートやがんによる手術体験者の講話を実施した。グループワーク、個別指導等はWeb会議システム Zoom（Zoom Video Communications, Inc.）を、課題の提出等は学習管理システム（Learning Management System）を活用し、3週間の遠隔実習において概ね実習目標の達成ができた。

今後は遠隔実習用シミュレーション教育の導入、事例の検討、実習施設との更なる協力体制の整備など、遠隔実習における効果的な実習内容の検討が課題である。

《キーワード》

急性期看護学実習、遠隔実習、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）

I. はじめに

2020年全国的なCOVID-19感染拡大に伴い、2020年4月7日、政府から緊急事態宣言が発出された。更に一斉休校要請が出され、大学のみならず、全国の教育機関に多大な影響を及ぼした。A大学では2020年度入学式翌日から全面休校の対応が決定され、学生の登校は原則中止となり、学内での対面授業や演習が実施できない状況となった。文部科学省の報告によると、2020年4月時点で全体の約9割の大学等において、学生を集めて行う通常の授業の開始時期等を延期し、例年通りの時期に実施するとしている大学等でも、ほとんどが、遠隔授業の実施を決定又は検討していたとされている(文部科学省, 2020)。

厚生労働省医政局厚生労働省健康局からは実習施設等の代替が困難な場合、実情を踏まえ実習に代えて演習又は学内実習等を実施することにより、必要な知識及び技能を修得することとして差し支えないこと、新型コロナウイルス感染症の対応等により実習中止、休講等の影響を受けた学生等と影響を受けていない学生等の間に、修学の差が生じることがないように配慮するとともに学生等に対して十分な説明を行うことが通達された(厚生労働省医政局厚生労働省健康局, 2020)。2020年9月の一般社団法人日本看護系大学協議会の報告によれば、領域別実習、統合実習の実施を計画していた実習695科目のうち、予定通りに実施できたのはわずか13科目(1.9%)であり、515科目(74.1%)が臨地では実施できず、学内実習に変更していた。計画を変更し、臨地で実施したのは131科目(18.8%)であった(一般社団法人日本看護系大学協議会高等教育行政対策委員会, 2020)。

A大学看護学部においては実習施設からの連絡により、急性期看護学実習は中止となった。そのため、すでに急性期看護学実習が終了している学生との学修の差が生じることを

最小限にし、学生の学修機会を確保できる実習内容、実習方法の検討が必要となった。

これまで、急性期看護学実習については以下のような学びが報告されている。例えば、急性期の患者の感情と反応から患者の危機的状況を理解すること(吉村ら, 2007)や、手術室看護の専門性や継続看護の重要性を学ぶこと(中井ら, 2020)、手術室に特徴的な感染管理や不安緩和への心理的援助、術中に実践される合併症予防の看護の理解を得ること(大塚ら, 2018)、手術室看護師の卓越したスキルや多職種連携によるチーム医療について学びを得ること(石橋ら, 2010)などがある。また、石渡ら(2018)は「確実な看護実践が患者の安全につながることを経験から学ぶ」と述べ、掛谷ら(2007)は「学生は実習における多くの体験から学び、自分なりに看護に対する考えを深める過程で生じる混乱という体験を通して自己成長していく」と実習体験による学生の成長について述べている。これらの学修効果を踏まえ、実習目標の修正、学修教材の選択、看護実践の代替方法、課題・記録物の提出時期と方法などを6名の教員で検討し、3週間の代替実習の内容を決定した。

ここでは2020年5月～6月にA大学看護学部において遠隔で実施した急性期看護学実習の内容をまとめ、今後の課題について検討する。

II. 2019年10月～2020年2月までの急性期看護学実習の概要

本実習は135時間3単位の科目である。2019年10月～2020年2月までに急性期看護学実習を実施した学生数は104名であった。

1. 実習目的・実習目標

実習目的は「急性期(周術期)にある人とその家族の全体像を理解し、必要な看護実践を行うための知識・技術・態度を習得する」である。実習目標は「1.周術期にある患者と

その家族に関心を寄せ、適切に援助関係を築くことができる。2. 周術期にある患者の特徴を理解し看護過程展開を展開できる。3. 周術期にある患者に対し、根拠に基づいた看護を実践ができる。4. 看護学生として責任ある態度（健康管理、礼儀、報告・連絡・相談、約束を守る）で実習できる」の4点である。

2. 2019年10月～2020年2月までの実習内容

実習期間は3週間（15日間）であり、そのうち12日間は外科系病棟で手術療法を受ける患者を受け持つ。1週目は受け持ち患者の術前・術中（手術見学）・術後看護を実践し看護過程の展開を行う。1週目の最終日又は実習2週目の前半に実習指導者と中間カンファレンスを行い、1週目の看護実践を共有した上で、翌週の実践につながるよう課題を明確化している。2週目は1週目の受け持ち患者を継続して受け持つ。受け持ち患者が退院した場合は2人目の患者を受け持つこともあるが、看護師のシャドウイングや短期の検査入院患者を受け持つこともある。3週目は前半で2つのカンファレンスを行っている。1つ目は手術カンファレンスであり、手術見学から得た術中看護についての学びを学生・手術室看護師・教員と共有している。2つ目は最終カンファレンスである。受け持ち患者の経過、看護実践内容などについて学生・実習指導担当者・教員で意見交換をし、学びを共有して病棟実習を統合している。3週目の後半は学内において高機能シミュレーターを用いたシミュレーション、教員との個別面談を行い記録の提出をもって実習終了としている。

評価は実習内容（看護実践）70%、実習記録10%、参加度10%、事前ワークブック10%である。

Ⅲ. 遠隔実習の検討

1. 遠隔実習の目的・目標

遠隔実習となり実習内容の変更が必要であったことから、遠隔実習の目的・目標を検討した。最終的には目的・目標はシラバスに明記されていること、変更するためには時間的猶予がないこと、更に、現時点では遠隔でできること、できないことが曖昧であること、といった理由から全体の目的・目標の修正・変更は行わないこととした。代わりに学生が理解しやすく、到達度を測ることができるように週間目標を明示することとした。

2. 遠隔実習の方法

5名のグループを5つ編成し、学生は自宅で遠隔実習に出席し、教員は学内から実習指導をする。

オリエンテーション、グループワーク、個別指導、がんによる手術体験者からの講話はWeb会議システムZoom（Zoom Video Communications, Inc.；以下、Zoom）を活用する。実習記録、日々の振り返り、その他レポート課題は学習管理システム（Learning Management System；以下、LMS）へ提出することとし、教員はZoomとLMS上でフィードバックをする。また、看護過程の展開に用いる周術期患者の事例は「VISUALEARN CLOUD」（株式会社 医学映像教育センター）の看護関連コンテンツから選定する。その他に病態・解剖生理学、フィジカルアセスメントなどのコンテンツを活用し、知識の補完をすることとした。更に、看護技術の復習として、看護技術オンライン教育ツール「ナーシングスキル日本語版」（Elsevier）を活用することとした。

1) 遠隔実習1週目の実習内容

1週目の週間目標は「周術期患者の看護事例を用いた疾患・病態理解と、看護過程の復習ができ、協働学修ができる」である。

まず、学生は VISUALEARN CLOUD の看護事例に関連したコンテンツから周術期看護関連の3番組を視聴する。視聴後に事前に提示された6つの看護テーマからグループで学修したいテーマを選択する。選択したテーマに沿ってグループワークを中心に学修を進め、週の最終日に全体発表会を行い、学びの共有をする。発表内容は「事例紹介」「疾患の病態」「治療法」「看護計画」を必須内容とし、発表資料は Microsoft Power Point (Microsoft) によるスライド10枚程度とした。発表時間は質疑応答を含めて10分とし、司会は学生2名、グループワークは Zoom のグループ分け機能を活用することとした。教員はグループワークに参加し進捗の確認と助言等を行うことを計画した。

2) 遠隔実習2週目の実習内容

2週目の週間目標は「①周術期にある患者の特徴を理解し、個別性を踏まえた看護ケアの提案ができる ②文献を検索し看護に関する研究を文献検索し、レポートとしてまとめることができる」である。

周術期患者の事例を用いた看護過程の展

開を課題とした。まず、教員は LMS 上に提示した事例を説明する。その後、学生は VISUALEARN CLOUD にある手術室看護関連コンテンツを視聴し、視聴後に事例を分析し、看護過程の展開を実習記録に記載する。教員は個別指導の時間を確保し、事例患者のアセスメントの視点や個別性、看護計画の立案などを指導する。更に、周術期看護に関連する文献検索を基にしたレポートを課題とした。

3) 遠隔実習3週目の実習内容

3週目の週間目標は「①がんによる手術体験者の講話から看護を考えることができる。②実習内容を振り返り、全体を総括することができる」である。

当事者参加型授業を取り入れ、がんによる手術体験者の講話を学修教材とした。体験者の体験談を聴き、その後に体験者と学生のディスカッションの時間を設ける。学生は事前にディスカッションのテーマを検討する。教員は体験者に講話内容の資料作成を依頼し、資料は LMS 上に提示することとした。

その他の実習内容としては、VISUALEARN

表1. 遠隔実習(1週目)

月日	時間	実習内容
1日目(月)	8:50~10:00	全体オリエンテーション (Zoom)
	10:00~12:00	VISUALEARN CLOUDコンテンツ視聴
		コンテンツ名「看護のためのアセスメント事例集」
		Vol.1「大腿骨頸部骨折患者の看護事例」
		Vol.2「胃切除術を受けた患者の看護事例」
13:00~15:30	Vol.6「乳房温存術を受けた患者の看護事例」	
	テーマに沿ってグループワーク (Zoom)	
2日目(火)	8:50~15:00	テーマに沿ってグループワーク (Zoom)
	15:00~15:30	ナーシングスキル日本語版視聴
3日目(水)	8:50~15:30	テーマに沿ってグループワーク (Zoom)
4日目(木)	8:50~15:30	発表資料の作成・共有
5日目(金)	8:50~11:00	全体発表会 (Zoom)
	13:00~14:00	1週目の振り返り・教員との個別面談 (Zoom)
	14:00~15:30	ナーシングスキル日本語版視聴

表 2. 遠隔実習 (2週目)

月日	時間	実習内容
6日目 (月)	8:50~12:00	VISUALEARN CLOUDコンテンツ視聴 「目で見える周術期看護」
	13:00~15:30	患者事例分析 実習記録記載 (教員から個別指導Zoom)
7日目 (火)	8:50~14:30	患者事例分析 実習記録記載 (教員から個別指導Zoom)
	14:30~15:30	ナーシングスキル日本語版視聴
8日目 (水)	8:50~12:00	患者事例分析 実習記録記載 (教員から個別指導Zoom)
	13:00~15:30	周術期看護関連文献検索
9日目 (木)	8:50~12:00	周術期看護関連文献検索、実習記録記載
	13:00~15:30	2週目の振り返り・教員との個別面談 (Zoom)
10日目 (金)	8:50~15:30	周術期看護関連文献レポート提出 実習記録記載

表 3. 遠隔実習 (3週目)

月日	時間	実習内容
11日目 (月)	8:50~12:00	がん体験者の講話に向けグループワーク (Zoom)
	13:00~15:30	周術期関連文献のまとめ 実習記録記載
12日目 (火)	8:50~12:00	グループワーク内容の全体共有 (Zoom)
	13:00~15:30	がん体験者の講話とディスカッションの準備 (Zoom)
13日目 (水)	8:50~9:30	がん体験者の講話とディスカッションの準備 (Zoom)
	10:00~12:00	がん体験者の講話 (Zoom)
	13:00~15:30	がん体験者の講話のレポート作成・提出
14日目 (木)	8:50~12:00	最終カンファレンス (Zoom)
	13:00~15:30	実習記録記載 ナーシングスキル日本語版視聴
15日目 (金)	8:50~15:30	教員との個別面談 (Zoom) ・実習記録提出 (LMS)

CLOUD とナーシングスキル日本語版からそれぞれ 15 コンテンツを教員が選定し、各週で指定された時間内に視聴することを課題とした。

3. 遠隔実習における評価

今回の遠隔実習では、実習記録 60%、事前ワークブック、周術期の看護に関連する文献レポート、がん体験者の講話からの学びレポート、実習参加度を各 10%とした。

IV. 遠隔による急性期看護学実習の実際

1. 遠隔実習の実際と学修状況

2020年5月、6月に遠隔で急性期看護学実習を行った学生は50名であり、全員が期限内に課題を提出し、本実習を終了することができた。実習初日の全体オリエンテーションでは教員から遠隔実習へ変更になったことの経緯、3週間の実習内容と評価、遠隔実習での注意点・ルールなどを説明した。

3週間の遠隔実習における学生の学修状況は、慣れない学修環境に不安を感じつつも、

実習目標の達成に向けて一つひとつの課題に主体的に取り組むことができていた。Zoomでのグループワークでは目線が合わせられないため意見が言いづらい、議論が深まらないといった状況も見受けられたが、次第にグループワークに慣れ、これまでの臨地看護学実習から得た知識を想起しながら、自分の意見を発言することができていた。患者事例を用いた看護過程の展開では教員から周術期患者のアセスメントのポイントや、個別性を踏まえた具体的な看護計画の立案などについて個別指導を受け、実習記録へ反映させることができた。更に、全身状態の観察項目と観察方法、回復過程促進への援助や退院後の生活支援の指導方法などの看護実践についても具体的にイメージし、言語化することができていた。文献検索では周術期看護に関連するテーマにおいて興味や関心のある研究テーマの文献を自由に検索し、新たな知見を得ることができていた。また、体験者からの講話は適度な緊張感の中、傾聴的・共感的態度で集中して受講できていた。体験者への質問や自身の考えを表現することで、体験者の治療の場に自分がいたとしたらどのような看護を提供できたかを思考し、模索しながら受講することができていた。体験者の日常生活を知ることによって周術期から退院後の生活支援までが周術期看護であることが理解できた。

その他の学修として教員が選定したVISUALEARN CLOUDとナーシングスキル日本語版の各コンテンツを全員が視聴し、周術期看護に必要な知識の補完と看護技術の復習をすることができた。

実習期間中における学生のZoom、LMSへのアクセスは良好であり、一部で映像や音声トラブルは発生したが、軽微な通信障害であり、遠隔における学修に影響はなく、予定通りの実習内容を実施することができた。

2. 遠隔実習の目標達成状況

本実習終了後の実習評価では実習の到達目標を達成することができたかを問う質問において95%(回答者45名中43名)が「そう思う」「ややそう思う」と回答していた。

V. 考察

今回、遠隔で実施した急性期看護学実習の3週間の実習内容を振り返り、考察するとともに今後の課題について述べる。

1. 遠隔実習における振り返りと効果的な学修内容の検討

遠隔実習1週目は選択した看護テーマに沿ってグループワークを行い事例患者の看護について全員で共有した。教員からは「疾患や病態理解を全員ができた」、「グループワークは知識の確認に効果的であった」「看護過程の展開の復習にグループワークは効果的であった」といった意見が出された。映像教材からは、学生が患者の表情や療養の様子をイメージし、看護師の動きや患者の反応から看護実践をイメージすることに一定の学修効果があったと推察した。しかし、映像教材の中には現在の治療法などが反映されていないコンテンツも見受けられた。最新の医療や治療法を反映した映像教材の作成や、医療現場の現状や看護実践の理解が推進できる事例の検討が必要と考えられた。

遠隔実習2週目は全員が同じ患者事例を用いて個人ワークを中心に看護過程の展開を行った。教員は個別に実習記録の内容を確認し、タイムリーにフィードバックをして学修支援を行った。患者事例を用いた看護過程の展開について教員からは「学生は丁寧に事例を分析していた」、「事例患者の個性を生かしたアセスメントが十分にできている」、「一般的な手術を受ける患者事例であり学生も取り組みやすかった」といった意見が聞かれた。1週目の学修が2週目の事例分析に活かされ、

事例患者の看護過程の展開は遠隔実習においても効果的に実施できたと考えられた。これまでの臨地看護学実習で習得した知識の定着、アセスメント力の向上につながられたと考える。

一方で「全学生が同じ事例で学修する必要があるのか」、「実習前学修として診療科別に学修してきたことが活用されない」との意見が出された。そのため、診療科別事例の作成や学生自らが興味のある事例を選択するなど、主体的学修につながられる方法を検討する必要があると考えられた。

遠隔実習3週目は当事者参加型授業としてがんによる手術体験者からの講話を取り入れた。松下ら(2012)は「当事者講義の有用性として当事者の生の声は病の体験を知らない学生にとってストレートに教員の主観や解釈に影響されることなく視聴覚的に無制限に入ってくる。互いに同じ人であることを前提とした対象理解と先入観の払拭につながる」と述べている。体験者の語りはより現実的で生々しく、「当事者の声は看護者の倫理的ケアへの感受性や問題意識を養う機会」となり(平野他, 2011)、その語りから治療の選択と患者の意思決定、看護師の対応や看護ケアに関する倫理的問題を学生が認識するきっかけとなったと推察できた。体験者から語られた「察する」看護を大事にし、患者から選ばれる看護師になってほしいという言葉に看護の責任や患者に寄り添うことの重要性を再認識し、今後の看護師としての自分自身のありようを描くことができたと考える。看護観は臨地看護学実習において直接的に患者や看護師と関わることで形成されていくが、学生にとって体験者からの講話は映像教材や患者事例からは得られないリアルな体験であり、倫理観や看護観の形成に影響を及ぼしたと考えられる。川島は(1973)、「看護観が明確化することによって看護や学習に意欲や自信がついていく」と述べており、学生の看護観を明

確化することはその後の学習意欲の推進、看護への自信につながるため重要である(青木ら, 2019)。教員からは「体験者と双方向でディスカッションができたことは効果的であった」、「今後の学修への動機付けができた」、「体験者の話を聴く体験は学生にとっては貴重であった」といった意見が出された。一方で、今回はがんによる手術体験者に講話を依頼したが、「手術対象者の疾患はがんだけではない」といった意見が出され、様々な疾病体験者に講話を依頼できる方法を検討する必要がある。

今回の遠隔実習では患者事例を用いた看護過程の展開、文献検索、がんによる手術体験者の講話を実習内容とすることで実習目標の達成を目指した。遠隔実習の実施状況を振り返り、いくつかの課題はあるものの、概ね実習目標の達成ができたと考える。

2. 今後の課題と展望

臨地看護学実習は学内の講義や演習で積み重ねた専門的知識・技術、更に専門職を目指すものとしての態度を統合し、「学修」「理解」の段階から「実践できる」段階に到達させるための重要な学修過程である。学生が既習の知識・技術をもとに対象と相互行為を展開しつつ、そこに生じた現象を教材として看護実践能力を習得する授業が看護学実習である(杉森他, 2009)。更に周手術期看護の理念とは術前・術中・術後の全期間を通して手術患者に一貫した全人的看護ケアを提供すること(雄西他, 2014)である。患者のベッドサイドで術前の不安に寄り添い、意思決定を支援し、術中は麻酔の影響や意識のない患者の代弁者としての看護の役割も学ぶ。術後は全身状態を観察し、手術や麻酔の影響による生体侵襲を理解する。痛みの訴えを聴き、手術創の観察や処置を実施し、術後合併症予防や回復促進の看護を臨床指導者の指導の下で実践する。患者やその家族とリアルにかかわり、

座学では得られなかった新たな学びを得ることが臨地看護学実習の醍醐味でもあり、看護の魅力を感じる場であると考えられる。しかし、今回の遠隔実習では、自らが立案した看護計画を実践すること、看護師から直接指導を受けること、患者の身体的・心理的支援を実践すること、更には、医療チームの一員として多職種と連携する体験など、テクニカルスキルに加えてノンテクニカルスキル向上のための学修もできない状況であった。遠隔実習という状況下であっても看護実践能力の習得をはじめとしたさまざまな学修体験ができ、高い学修効果が得られるような教育方法の検討が課題である。

今後も COVID-19 感染拡大状況により遠隔実習が実施されることが予測される。厚生労働省医政局からは、臨地と大学をオンラインで接続し、「臨床実習への協力の同意を得た患者にオンラインで聴取する」、「指導教員が収集した患者の日々の様子の映像情報を用いて、計画を策定する」、「リアルタイムの患者の状況を確認・評価しながら、日々の計画を策定する」など、実習等に関する各学校養成所等での実践事例が提示された(2020年2月28日)。今後はこれらの実践事例をA大学看護学部の遠隔実習でも取り入れられるように実習施設との協力体制を更に整備していきたい。例えば、患者事例を実習指導担当者と共有し、看護過程の展開を行う、遠隔でシミュレーションを実践するなどである。更に、学生の学修環境の整備や遠隔システムにおける様々なアプリケーションソフトの活用、遠隔実習用記録用紙の工夫、学修教材(事例)の選択などの検討や遠隔でも可能なシミュレーションの開発、学修の質担保、教員の教育力の強化など課題は多い。今回の遠隔実習における経験を活かし、更に学修効果を高めるための実習内容の検討に取り組んでいきたい。

文献

- 青木亜砂子, 佐々木律子 (2019): 看護学生の看護観の形成に関する文献検討, 北海道文教大学研究紀要, 43, 107-116.
- 石橋鮎美, 三島三代子, 別所史恵他 (2010): 成人看護実習の手術見学における看護学生の学び, 島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要, 4, 81-89.
- 石渡智恵美, 菱刈美和子 (2018): 周手術期実習におけるICU・HCU看護実習を体験した学生に学びと看護観に関する研究, 帝京科学大学紀要, 14, 111-116.
- 一般社団法人日本看護系大学協議会高等教育行政対策委員会, 2020年度看護系大学4年生の臨地実習科目(必修)の実施状況調査結果報告書(令和2年9月25日), 2020年12月15日.
- 大塚知子, 牧野夏子, 城丸瑞恵他 (2018): 周術期看護実習における手術見学実習での学生の学び, 札幌保健科学雑誌, 7, 31-37.
- 雄西智恵美, 秋元典子 (2014): 周手術期看護論, 第3版, 14, ニューヴェルヒロカワ, 東京.
- 掛谷益子, 名越恵美, 細川つや子他 (2007): 成人看護実習前後の看護観の変化, インターナショナル Nursing Care Research, 6 (1), 59-66.
- 川島みどり (1973): とともに考える看護論, 40, 医学書院, 東京.
- 厚生労働省医政局厚生労働省健康局 (2020): 新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について, <https://www.mhlw.go.jp/content/000605026.pdf> (2020.2.28).
- 杉森みど里, 舟島なをみ (2009): 看護学教育第4版, 251-296, 医学書院, 東京.
- 田中理子, 山脇京子 (2020): 看護学生の臨地実習自己効力感及び職業的アイデン

ティティと社会人基礎力の関連，第50回
日本看護学論文集，看護教育，23-26.

中井裕子，笹山万紗代，政時和美他（2020）：
手術室見学における看護学生の学び，福岡
県立大学看護学研究紀要，17，71-77.

平野文子，別所史恵，坂根可奈子（2011）：
がんサロン訪問における「患者・家族の声
を聴く」看護学生の倫理的学び，島根県立
大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要，
5，179-188.

松下年子，本谷久美子（2012）：看護学教育
における当事者講義の有用性－看護学生
を対象としたフォーカス・グループインタ
ビューの結果より－，埼玉医科大学看護学
科紀要，5（1），9-15.

文部科学省（2020）：令和2年度における
大学等の授業の開始等について（通知），
https://www.mext.go.jp/content/20200324-mxt_kouhou01-000004520_4.pdf（2020.11.30）.

文部科学省（2020）：新型コロナウイルス
感染症対策に関する大学等の対応状況
について，https://www.mext.go.jp/content/20200424-mxt_kouhou01-000004520_10.pdf
（2020.12.15）.

吉村弥須子，白田久美子（2007）：周手術期
看護実習における学生の体験からの学び
－ICUに入室した患者への術後看護の体
験－，大阪市立大学看護学雑誌，3，49-60.